

国学院大学図書館蔵伝藤原為家卿筆

## 「源氏物語 花宴」(一軸)について

はしがき

このたび、国学院大学図書館のご高配によって、本学所蔵の伝藤原為家卿筆「花宴」(一軸)を閲覧する機会を得た。源氏物語「花宴」巻は、いわゆる青表紙本系統では藤原定家筆本を臨模した明融臨模本が存在し、東海大学蔵桃園文庫影印叢書として刊行されている。本学所蔵の当該本は、鎌倉期書写の河内本系統の写本であるが、その中でも特にすぐれた伝本である。以下、その書誌、翻刻、解説を記す。

### 【書誌】

外函 黒漆塗箱 箱書 ナシ

内函 桐箱 箱書「源氏物語 花宴」

箱裏蓋「藤原為家卿筆 ふくたしるす」

極札等付属文書 ナシ

形態 一軸 緞子表紙 紺色・折線茶花紋様

見返し 金泥色・水鳥葦山水辺紋様

渋谷 栄一

## 緑色組紐

本文 本紙鳥の子薄様・台紙楮紙 もと縦約三三・一cm×横約二二・五cmの冊子本十二丁であったものを一面を二枚に切り離して台紙に張りつけて卷子本に仕立て直したものである。

書式 一面十一行書き、一行十九字乃至二十三字ほど、最終丁は一面のみで七行書きである。

筆者 伝藤原為家筆

書写年代 鎌倉期

本文系統 河内本

朱筆の句読点有、ただし句点と読点を区別せず字間中央に打つ。

和歌は改行して二字下げて始まり、末尾は地の文に続ける。

函架番号 貴重図書二六九九

資料価値 中央公論社『源氏物語大成』・東京堂『源氏物語事典』等には未報告、小松茂美『古筆学大成』第23卷「物語・物語注

釈一」平成4年6月講談社に紹介されているものである。

## 【翻刻】

きさらきのはつかあまり・南殿のさくらの宴

せさせ給・きさき・春宮の御つほね・ひたりみき

にして・まうのほりたまふ・こきてんの女御は・

中宮かくておはするを・おりふしことにやすか

らすおほせと・物みにはえすくしたまはてまいり

給へり・日いとよくはれて・そらのけしき・とりの

こゑ心ちよけなるに・かんたちめ・みこたちより

はしめて・そのみちのはみな・たむるん給はりて・

ふみつくりたまふ・宰相中将・春といふもした

まはれりとのたまふこゑさへ・れいの人にことなり・

つきにとうの中將・人のめうつし・いか、とた、」(第一紙)

ならずおほゆへかめれば・こ、ろつかひして・いとめ

やすくもてしつめたるようい・こはつかひなど

ものくしう・なへての人にはすくれたり・さての

人はみなおくしかちにはなしろめるおほかり・

地下の文人などは・ましてみかと東宮もさえかし

こく・か、るかたにやん事なき人おほくものし

たまふころなるに・はるく、とくもりなきおまへ

のにはに・たちいつる心ちとも・はしたなくて・

やすきほとん事なれと・いとくるしけなり・と

しおいたるはかせとも・なりあしくやつれた

れと・れいのなれたるさまとも、あはれにさまく」(第二紙)

御覽せらる、なんおかしかりける・かくともは

さらにもいはす・かきりなくと、のへさせ給へり・

やうく、いりひになるほとに・春のうくひすさえつる

といふまひ・いとおもしろくみゆるに・源氏のきみの

御もみちの賀のおりおほしいてられて・春宮

かきしたまはせて・せちにせめのたまはする

に・のかれかたくて・たちてのとかにそてかへすところ  
を・ひとかへりけしきはかりまひたまへるに・にるへき  
ものなくみゆ・ひたりのおと、うらめしさもわすれて・

なみたくみたまふ・つきにとうの中將いつらをそし

とあれは・柳花苑といふまひを・これはいますこし」(第三紙)

すくして・かゝる事もやと心つかひやしたり

けん・いとおもしろくまひたまへれは・おほんそ

たまはりて・めつらしきれいに人おもへり・さらぬ

かんたちめも・あまたみたれまひたまへと・よにいり

ぬれは・ことにけちめもみえす・詩ともかうするに・源

氏のきみの御をは・講師も江よみやらす・くことにす

しの、しる・はかせとものおもへるけしきなど・いと

いみし・かやうのおりにも・た、このきみをひかり

にしたまへれは・いかてかはみかとのをろかにおもひ

きこえたまはん・中宮は御めのとまるにつけ

ても・東宮の女御のあなちにくみたまふらんも・」(第四紙)

あやしう・わか、くおもふも・いかなれはと心うくそ・

かへさひおもほしける

おほかたにはなのすかたをみましかはつゆも

こゝろのをかれましやは・と御こゝろのうちなりけん  
事・いかてかもりにけん・よいたうふけてなん・ことは

てにける・かむたちめをのくあかれ・とう宮中宮か

へらせ給なしぬれは・のとやかになりぬるに・月いと

あかくさしいて・おもしろきを・源氏のきみゑひ

こゝちに・みすくしかたくおほえたまひければ・う

への人くもうちやすみて・かやうにおもひかけぬほとに・

もしさりぬへきひまもやと・ふちつほわたりを・わり」(第五紙)

なくしのひて・うか、ひありきたまへと・かたらふ

へきとくちもさしてければ・うちなけきて・なをあ

らしに・こきてんのほそとのにたちよりたまへ

れは・三のくちあきたり・女御はうへの御つほねに・

やかてまうのほりたまひにければ・人すくなゝるけ

しきなり・おくのくるゝともあきて・人をともせず・

かやうにて・よの人はあやまちもするそかしと思てや

をらのほりてのそきたまへは・人はみなねたるなる

へし・いとわかくおかしきこゑのなへての人とは

きこえぬにて・おほろ月よにゝるものそなき

と・うちすして・こなたさまにはくるものか・いと」(第六紙)

うれしくて・ふとそてをとらへつ・をんなおも

ひかけす・うとましとおもひて・あなおそろし・  
こはたそとのたまへは・なにかおそろしきとて

ふかきよのあはれをしるもいる月のおほろ

けならぬちきりとそおもふ・といふまゝにやをら

いたきおろして・とはをしたてつ・あさましと

あきれたるけはひ・いとらうたけになつかし・わな

なくくこゝに人とのおたまへは・まろはみな人にゆる

されたる身なれは・めしよせたりとも・なてう事か

はあらん・たゝしのひてこそとのたまふこゑにそ・

このきみなりけりときくに・すこしなくきみける・」(第七紙)

わひしと思ものから・なきけなくこはくしうは

みえしとおもへり・ゑひこゝちやれいならさりけん・

ゆるさん事はくちをしきに・女もわかく・たをや

きて・つよき心もえしらぬなるへし・らうたしとみ

たまふに・ほとなくあけゆくけはひなれは・いと心

あはたゝし・女はましてさまくにおもひみたれたる

けしき・いみしければ・なをなのりし給へ・いかて

かきこゆへき・さりとともかくてやみなんとは・よにお

ほさしなどのたまへは

うきみよにやかてきえなはたつねても草

のはらをはとはしとやおもふ・といふさまいとなまめ」(第八紙)  
かしう・又きかまほしきさましたり・ことはりやき  
こえたかへたるもしかなとて

いつれそとつゆのやとりをわかむまにこさゝか  
はらにかせもこそふけ・わつらはしくおほす事

なくは・なにかはつゝまむ・もしすかいたまふかとも・

江いひあえす・人くおききはき・うへの御つほねに

まいりちかふけはひともしけくまよへは・わりな

くて・あふきはかりをしるしとにや・とりかへていて

たまひぬ・きりつほにも人くおほくさふらひて・

おとろきたるもあれは・さもたゆみなき御しのひ・

ありきかなとつきしろひつゝそらねをそする・」(第九紙)

いりてふしたまへれと・ねもいられたまはす・おかし

かりつる人のけはひかな・女御の御をとうとゝもに

こそはありつらめ・またよになれぬは五六のほとな

らんかし・そちの宮のきたのかた・とうの中將のす

さめぬ四のきみなとこそ・よしときゝしか・それな

らましかは・なかくゝいますこしおかしうおほえなま

し・六のきみはとう宮にたてまつらんととりわき

心さして・かしつき給なるを・いとをしくもあへきかな

と・わつらはしくたつねんほとも・まきはしくなと  
思みたれ給・さすかにたえてやみなん事は・つらかる  
へくおもへりつるけしきながら・いかなれは・事」(第一〇紙)  
かよはすへきたよりをは・をしへすなりぬらんなど・  
よろつにおほしあつかはるゝも・心のとまるなる  
へし・かやうなるにつけても・まつかのわたりの御  
ありさまのこよなうおくまりたるはやとありかた  
うおもひくらへられたまふ・その日は後宴の事  
ありて・まきれくらしたまひつゝ・きのふの事よ  
りもまさりてなまめかしくおもしろし・ふちつほ  
はあか月にまうのほりたまひにけり・かの  
ありあけの人いてやしぬらんと・こゝろもそらに  
て・おもひいたらぬくまなき・よしきよ・これみつを  
つけてうかゝはせ給・御まへよりおりたまへるに・」(第二一紙)  
たゝいまならん・きたのちんにかくろへつゝたて、  
はへりつるくるまとも・いてはへりつるや・御かたく  
のさとひとゝもならんとみはへりつるなかに・四位の  
少将左中弁なといそきいて、をくりしかし  
つきはへりつるにこそ・こきてんの御あかれに  
はへめりつれ・けしうはあらぬけはひともしるく



て・くるまみつはかりはへりつときこゆるにも・む  
ねうちつふれていかにしてかいつれとするへからん・  
ち、おと、き、つけ給ては・ことくしくもてなき  
れんも・いかにそや人のありさまなと・よくみきため  
ぬほとは・わつらはしかるへし・さりとてかくなから」(第二二紙)  
すきなん・はたくちをしかるへければ・いかにせまし  
とおほしわつらひて・つくくとなかめふしたまへ

り・ひめ君いかにつれくにおほえたまふらん・日ころ  
になりぬれは・れいのくむしやしたまふらんと・

心くるしうおほしやる・かのしるしのあふきは・さくら  
のみへかさねにて・こきかたにかすめる月をかきて・  
みつにうつしたる心はへなと・めなれたる事なれと・  
ゆへなつかしくもてなしたり・くさのはらをはといひ  
しさまの・御心にかゝりておほえたまへは

よにしらぬこ、ちこそすれありあけの月の

ゆくゑをそらにまかへて・とかきつけておきたまへ」(第二三紙)

り・まかてたまふに・おほいとのもひさしうなりに  
けりとおほせと・まつわかきみの心くるしき・こし  
らへおかんとおほして・二条の院におはしぬ・みるま、  
にうつくしうのみおいなりて・あいきやうつきらうく

しき御こゝろはへいとことなり・あかぬところなく・  
わか御こゝろのまゝにをしへなさんとおほすに・かな  
ひぬへし・おとこの御をしへなれば・すこし人なれた  
るところやましらむとおもふこそ・うしろめたけ  
れ・日ころの御ものかたりともきこ江・御ことなど日  
ひとひをしへくらしたまて・よるになれはいて給を・  
れいのくちをしとおほしたれと・いまはいとよく」(第一四紙)  
ならはされて・わりなくはしたひきこ江たまはず・  
おほいとには・れいのふともたいめし給はず・つれくと  
うちなかめて・よろつおほしめくらされて・さうの  
ことをまさくりつ・やはらかにぬるよはなくてと・  
うたひすきひつ・おはするに・おとゝわたりたまへり・  
一日のことゝものけうありし事なときこえたま  
ふ・こゝらのよはひにて・明王の御代四代にあひ  
はへりぬれと・このたひのやうに・ふみとも・きやうさ  
くに・まひかくとゝのほりて・よはひのふることなん  
みはへらさりつる・みちくのものゝ上すとも・おほかり  
けるころほひなるを・くはしくきこしめしいれて・」(第一五紙)  
とゝのへさせたまへりけるとなむみたまへし・おき  
なもほとくまひいてぬへきこゝちなむし侍り

しときこえたまへは・ことにわきとと、のへいとなむ

事もはへらさりき・た、おほやけ事・かたむ

もの、しともを・こ、かしこにかしこくたつねい

て、侍りしなり・一日の事よろつのことより

は・柳花苑なん・まことに後代のれいともなり

ぬへき事とみはへりしを・ましてさかゆるはる

にたちいてさせたまへらましかは・いみしきよの

めいほくに侍らましなときこえ給ほとに・中将弁

なとまいりあひたまへれば・さまくの御ものかたり」(第一六紙)

ともきこ江たまひつ、・とりくにももの、ねともし

らへあはせてあそひたまふ・いとおもしろし・かの

ありあけのきみは・はかなかりしゆめの、ち・

物いとなけかしくて・なかめをのみし給・春宮も

四月はかりとおほしきためたるをみたまふにも・

いとわりなくおもひみたれたまへり・おとこきみ

もわする、時はなし・たつねたまはんにあとはか

なきにはあらねと・いつれともしらて・ことにゆるし

たまはぬあたりに・か、つらはんも・人わろきこ、ち

し給へは・とかくおほしやすらふなりけり・三月

廿よ日に・みきのおほいとのに・ゆみのけちに・上達部」(第一七紙)

殿上人おほくつとへたまうて・やかてふちのはな  
のえんし給けり・はなさかりはすきにけれど・ほか  
のちりなんとやをしへられたりけん・をくれて  
さきたるさくらふたきはかりいとおもしろし・あた  
らしうつくりたるのを・みやたちの御もきに・  
みかきたてられたるまゝに・いとめてたし・なにこと  
もはなくともものしたまふところやうにて・いといま  
めかしうもてなし給へり・源氏のきみはうち  
にて御たいめむのついでにきこえ給しかと・おほ  
せねは・くちをしうもの、はへなしとおほして・  
御このくら人の少将をたてまつれたまふ」(第一八紙)

わかやとのはなしなへてのいろならはなに  
かはさらに君をまたまし・うちにさふらひたま  
ふほとなれは・やかてかくなんとそうしたまふ・した  
りかほなりやとわらはせ給て・わさとあめるを・はや  
ものせよかし・をむなみこたちなとおい、つるところ  
なめれは・なへてにはおもふましきをとのたまはず・  
御よそひなと心ことにひきつくろひて・くる、  
ほとにいたうまたれてそわたりたまへる・さくら  
のからのきの御なほし・えひそめのしたかさね・

しりいとなくひきて・みな人はうへのきぬなる

に・あされたるおほきみすかたのなまめきたるに」(第一九紙)

ていつかれいりたまへるさま・けにそめてたき・はな

のにほひもけをされて・なか／＼事さましにそ

みゆる・御あそひなといとおもしろし・よすこし

ふけゆくほとに・源氏のきみいたうゑひなや

めるさまにもてなして・まきれたち給ぬ・しん

てんには・女一宮女三宮おはします・ひんかしの

とくちにおはして・より給へり・ふちはこなた

のつまにあたりてあれは・みかうしともあけ

わたして・人／＼いてゐたるなりけり・そてくち

ともこのほれいてたるさまなど・たうかのおり

おもひいてられて・ことさらめきもていてたるを・」(第二〇紙)

ふさわしからすと・まつふちつほわたりおも

ほしいてらる・なやましきにいたうしゐられて・

わひにてはへり・かしこけれと・このおまへにこそ

は・かけにもかくさせ給はめとて・つまとのみす

をひき、たまへは・あなわつらはし・よからぬ人

こそ・やむことなきゆかりはかこちはへるなれと

いふ人あり・けしきともをみたまへは・いとおも／＼

しうはあらねと・をしなへてのわか人ともには  
あるまし・あてにおかしきけはひともしるし・  
そらたき物けふたきまてくゆりいて・きぬのお  
となひさはやかにふるまひなして・おくまり」(第二二紙)  
心にくきけしきはたちをくれて・いまめかし  
きことをのみこのみ給わたりにて・やむ事なき  
御かた／＼のものとみ給とて・このとくちはしめ  
たまへりけるなるへし・さしもあらてあり  
ぬへき事なれと・さすかにおかしうおほされ  
て・いつれならんとむねうちつふれ給・あふきを  
とられてからいめをみるとうちおとけたるこゑ  
にいひなしてよりふしたまへれば・あやしう  
もさまかへたるこまうとかなといふは・こゝろへぬ  
人なるへし・いらへはせてた、時／＼うちなけく  
けはひなるかたによりか、りて・き丁こしに」(第二二紙)  
てをとらへたまで

あつきゆみいるさのやまにまよふかなほのみし  
月のかけやみゆると・なにゆへかとをしあてに  
の給にえしのはぬなるへし

こゝろいるかたならませはゆみはりの月なき

そらにまよはましやは・といふこゑた、それなりうれしきものから」(第二三紙)

### 【解説】

本文系統は河内本である。『源氏物語大成校異篇』所載の河内本校異とほとんど一致する。なかんずく尾州家本との関係が顕著である。河内本系統の中でも異文がある場合には尾州家本とほとんど一致する。なお尾州家本は池田亀鑑著『源氏物語大成』には伝六条有忠筆とあるが、それは古筆了意の極札によつたもので、山岸徳平氏は為家風の書体に分類し、「この巻は、後京極流と趣を異にし、西行物語の詞書と類して居る。即ち為家流である」(山岸徳平『尾州家河内本源氏物語開題』昭和12年初版、昭和52年再版、一六一頁)という。書体も類似している(写真、参照)。尾州家本は縦三一・八cm×横二五・八cmという大型本である。小松茂美氏は「筆者を藤原為家へ一一九八―一二七五」と伝えるが、その真跡ではない。しかしながら、為家の生存期に適合する写本で、古筆家の鑑定は時代相応というべきである。本文は河内本の系統。本文中に朱筆の句読点を打っている。河内本の成立後、ほどないころに書写された当代類本中その比を見ない大型本で、高貴の人に進覧された一本ではなかったか」といい、「これら一群の断簡は、「若紫」(図版161)、「花宴」(図版162)①・②、完本——当該本、渋谷注)、「賢木」(図版171・163・164)、「薄雲」(図版165)、「真木柱」(図版166)、「竹河」(図版167)の巻々である」「当初は一具五十四帖の揃いであったものだろう。江戸時代初期には、すでに右の数帖を残す残欠本となり、それらが分断されたと推察される」(『古筆学大成』第23巻解説、四〇〇頁)という。以下、特に尾州家本と本書の関係について考察する。

#### 一、本文上の共通点と問題点

まず、尾州家本と国学院大学本との本文上の異同の問題について取り上げる。なお、『源氏物語大成校異篇』に対校されている河内本は高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本の四本である。また別本は御物本の一本である。

#### 1 尾州家本と国学院大学本の異同

①たまひへれは(二丁裏4行目)―たまへれは(第四紙2行目)

- ②はてはける (三丁表7行目) | はてにける (第五紙5行目)
- ③かむたちめ (三丁表8行目) | かむたちめ (第五紙6行目)
- ④見すくし (三丁表11行目) | みすくし (第五紙9行目)
- ⑤しるしにとにや (五丁表10行目) | しるしにとにや (第九紙8行目)

\*しるしにとにや尾大 | しるしにとにや宮平

- ⑥四位少将 (六丁裏6行目) | 四位の少将 (第一二紙3行目)
- ⑦日ころの (八丁表1行目) | 日ころの (第一四紙9行目)
- ⑧たいめむ (八丁表5行目) | たいめ (第一五紙2行目)
- ⑨春宮に (九丁表7行目) | 春宮も (第一七紙4行目)

\*春宮には青・別 | 春宮に河

- ⑩やかてかくなん (一〇丁表6行目) | やかてかくなん (第一九紙3行目)
- ⑪おむなみこたちなと (一〇丁表8行目) | おむなみこたちなと (第一九紙5行目)
- ⑫みたまへは (一一丁表8行目) | みたまへは (第二一紙7行目)
- ⑬きぬの (一一丁表11行目) | きぬの (第二一紙10行目)

①は尾州家本のミセケチが国学院大学本ではその訂正後の本文になっている例。②④⑦⑩⑪⑫⑬は尾州家本の補入が国学院大学本ではその補入後の本文になっている例。それに対して、③は国学院大学本の補入が尾州家本ではその補入後の本文と同文となっている例である。⑥⑧は尾州家本と国学院大学本との表記上の異同である。

⑤は「あふきはかりをしるしにとりかへて」(大島本・大成二七二頁13行)という文脈である。尾州家本と大島本(河)には格助詞「に」があり、高松宮家本と平瀬本は断定の助動詞「に」が無い、という形。国学院大学本は格助詞「に」が無い形。河内



本諸本間でも異同があるから、誤写によって生じた異同という可能性が高い。微妙なニュアンスの相違が生じるといった程度の問題である。

⑨は「春宮には卯月はかりとおほしきためたれば」（大島本・大成二七六頁3行）という文脈。朧月夜の東宮入内が話題になっている場面である。「おほしきためたれば」の主語は誰か。大島本等の本文「春宮には」では、主語を朧月夜の父右大臣ともまた東宮とも解せよう。「春宮に」といえば、はっきりと主語は父右大臣となる。一方、「春宮も」といえば、主語は「春宮」となる。本来、右大臣らが東宮の父帝である桐壺帝に奏上し内意を得た上で朧月夜の入内を実行に移そうというものである。もちろん東宮にもその話は伝えられているはず。そうした上での「卯月はかり」という決定である。青表紙本系統諸本及び別本の御物本ではその主体を右大臣とも東宮ともいずれにも読み取れるような表現であったのを、尾州家本等の河内本では右大臣をその主体に読み取っているのに対して、国学院大学本では東宮をその主体に読み取っているのである。なお、『源氏物語大成』の校異欄には河内本すべて「春宮に」とあるように記載されているが、高松宮家本の複製本には、「春宮には」とあり、青表紙本と同文である。しかしいずれにしても国学院大学本の独自異文、独自の読みが見られるところである。

## 2 尾州家本と国学院大学本の単独共通異文

①はへりつるここそ（六丁裏7行目）―はへりつるここそ（第一二紙5行目）

共通異文というわけではないが、尾州家本における補入の形が国学院大学本にも同じく補入の形で見られる例である。

### 二、表記上の問題点

次に表記上また仮名遣い上の異同の問題について取り上げる。

#### 1 特に副詞「え」とヤ行下二段活用動詞「きこゆ」連用形の字母「江」の表記

鎌倉期写本の中には副詞「え」とヤ行下二段活用動詞の連用形に字母「江」と表記する例が見られる。国学院大学本にもそれが見られる。

尾州家本には字母「江」で表記する箇所が、副詞「え」とヤ行下二段活用動詞「きこゆ」の連用形の各1例ずつ、すべて2例

ある。

① 講師も江よみやらす（二丁裏8行目）

② ありし事なときこ江給（八丁表9行目）

一方、国学院大学本では字母「江」で表記する箇所が、副詞「え」は2例、

① 講師も江よみやらす（第四紙6行目） \*尾州家本①の例

② 江いひあえず（第九紙6行目）

と見える。また、ヤ行下二段活用動詞「きこゆ」の連用形は3例ある。

③ 日ころの御ものかたりともきこ江（第一四紙9行目）

④ わりなくはしたひきこ江たまはず（第一五紙1行目）

⑤ 御ものかたりともきこ江たまひつゝ（第一七紙1行目）

しかし、国学院大学本では「きこゆ」の連用形をすべて「江」と表記しているわけではない。

\*ことはりやきこえたかへたるも（第九紙1行目）

\*けうありし事なときこえたまふ（第一五紙6行目） \*尾州家本②の例

という例もある。しかし、いずれにしても国学院大学本は尾州家本よりも副詞「え」とヤ行下二段活用動詞「きこゆ」の連用形に字母「江」が多く表記されているのである。

2 「お」と「を」と「ほ」の異同

① おろかに（二丁裏11行目）―をろかに（第四紙9行目）

② をそろし（四丁表4行目）―おそろし（第七紙2行目）

③ 御おとうと（五丁裏5行目）―御をとうと（第一〇紙2行目）

④ いとおしく（五丁裏11行目）―いとをしく（第一〇紙8行目）

⑤くちおしかる（七丁表3行目）―くちをしかる（第一三紙1行目）

⑥かきつけてをき給へり（七丁裏3行目）―かきつけておきたまへり（第一三紙11行目）

⑦こしらへをかむ（七丁裏5行目）―こしらへおかん（第一四紙2行目）

⑧ころをひ（八丁裏2行目）―ころほひ（第一五紙11行目）

⑨おむなみこ（一〇丁表8行目）―をむなみこ（第一九紙5行目）

⑩をとなひ（一一丁表11行目）―おとなひ（第二二紙10行目）

歴史的仮名遣いとしては、①「お」、②「お」、③「お」、④「ほ」、⑤「を」、⑥「お」、⑦「お」、⑧「ほ」、⑨「を」、⑩「お」が正しい。国学院大学本のほうが尾州家本よりも歴史的仮名遣いという点では、7―2で勝っている。

なお、尾州家本⑤の語句は他の箇所では「くちをし」（八丁表3行目・一〇丁表1行目）という表記もある。

### 3 「え」と「ゑ」と「へ」の異同

①きこへ（五丁表4行目）―きこえ（第九紙1行目）

②こゝろえぬ（一一丁裏10行目）―こゝろへぬ（第二二紙9行目）

歴史的仮名遣いとしては、①は「え」、②は「ゑ」が正しい。

### 三、漢語と声点について

尾州家本「花宴」には、次の二語に声点が付けられているが、国学院大学本にはいずれの箇所にも声点は付いていない。

①「たむゐるん（探韻）」（二丁表8行目・第一紙8行目）

②「かたむ（紆）」（八丁裏7行目・第一六紙4行目）

### 四、句読点について

尾州家本には、「早蕨」巻を除いて、各帖に朱点で句読点が施されているが、いわゆる句点は文字の右下に、読点は文字と文字との中間に付けている帖（三十一帖）と区別のない帖とがある（秋山虔・池田利夫編『尾州家河内本源氏物語』凡例、武蔵野書

院)。尾州家本「花宴」は、その区別のある帖だが、国学院大学本は、朱点がすべて文字と文字との中間に付けられており区別がない帖である。以下、尾州家本と国学院大学本との句読点の異同について取り上げる。

1 尾州家本に有って、国学院大学本に無い句読点(句読点の上の語句を掲出)

- ①こはつかひなど(二丁裏4行目・第二紙2行目)
- ②やむ事なき人(二丁裏7行目・第二紙6行目)
- ③かむたちめ(三丁表8行目・第五紙6行目)
- ④そかしと思て(三丁裏9行目・第六紙7行目)
- ⑤たかへたるも(五丁表4行目・第九紙2行目)
- ⑥つきしろひつ、(五丁裏2行目・第九紙11行目)
- ⑦またよになれぬは(五丁裏6行目・第一〇紙3行目)
- ⑧六のきみは(五丁裏9行目・第一〇紙7行目)
- ⑨とう宮にたてまつらんと(五丁裏10行目・第一〇紙7行目)
- ⑩おくまりたるはやと(六丁表7行目・第一一紙4行目)
- ⑪まさりて(六丁表9行目・第一一紙7行目)
- ⑫なまめかしく(六丁表10行目・第一一紙7行目)
- ⑬むねうちつふれて(六丁裏10行目・第一二紙8行目)
- ⑭いかにしてか(六丁裏10行目・第一二紙8行目)
- ⑮あいきやうつき(七丁裏7行目・第一四紙4行目)
- ⑯御ことなど(八丁表1行目・第一四紙9行目)
- ⑰かたむ(八丁裏7行目・第一六紙4行目)

## 2

- ⑮ まして（八丁裏11行目・第一六紙8行目）
  - ⑯ しらへあはせて（九丁表4行目・第一七紙2行目）
  - ⑰ 源氏のきみはうちにて（九丁裏11行目・第一八紙9行目）
  - ⑱ やかてかくなんと（一〇丁表6行目・第一九紙3行目）
  - ⑳ いたうまたれてそ（一〇丁表11行目・第一九紙8行目）
  - ㉑ なまめきたるにて（一〇丁裏3行目・第二〇紙1行目）
  - ㉒ 女一宮（一〇丁裏8行目・第二〇紙6行目）
  - ㉓ なやましきに（一一丁表4行目・第二一紙2行目）
  - ㉔ このとくちは（一一丁裏4行目・第二二紙3行目）
  - ㉕ からいめをみると（一一丁裏7行目・第二二紙7行目）
  - ㉖ いらへはせて（一二丁裏10行目・第二二紙10行目）
  - ㉗ なにゆへかと（一二丁表3行目・第二三紙3行目）
  - ㉘ をしあてにの給に（一二丁表4行目・第二三紙4行目）
  - ㉙ た、それなり（一二丁表6行目・第二三紙7行目）
- 国学院大学本に有って、尾州家本に無い句読点（句読点の上の語句を掲出）
- ① ふちつほわたりを（三丁裏2行目・第五紙11行目）
  - ② かやうにて（三丁裏8行目・第六紙7行目）
  - ③ 女もわか（四丁裏5行目・第八紙3行目）
  - ④ 御しのひ（五丁裏2行目・第九紙10行目）
  - ⑤ た、おほやけ事（八丁裏7行目・第一六紙4行目）

- ⑥ あそひたまふ（九丁表5行目・第一七紙2行目）
- ⑦ 物いとなけかしくて（九丁表6行目・第一七紙4行目）
- ⑧ みかきたてられたるまゝに（九丁裏8行目・第一八紙6行目）
- ⑨ あなわつらはし（一一丁表7行目・第二一紙5行目）

### 3 尾州家本と国学院大学本の句読点の位置が異なる付け方がなされている例

- ① とそおもふと・（四丁表7行目）――とそおもふ・と（第七紙5行目）
- ② とやおもふと・（五丁表2行目）――とやおもふ・と（第八紙11行目）
- ③ まよはましやはと・（一一丁表6行目）――まよはましやは・と（第二三紙6行目）

朱の句読点に関しては、尾州家本のほうが詳細に打たれており、しかも句点と読点の区別もなされている。読点はともかく句点があつてしかるべきではないか、と思われる箇所では、尾州家本では、「あそひたまふ」（九丁表5行目）「あなわつらはし」（一一丁表7行目）の2箇所、国学院大学本では、「たゝそれなり」（第二三紙7行目）の1箇所である。また、句読点の打ち方として問題のあるものとして、国学院大学本の「御しのひ」（第九紙10行目）がある。これは「御しのひありき」という一語とすべきである。その他に、読点の打ち方の特徴として、尾州家本では引用の格助詞「と」の下に打つのに対して、国学院大学本では「と」の前に打つことである。

### むすび

以上、尾州家本と国学院大学本との関係についてまとめると、第一に、本文の上では河内本諸本の中でも最も近似した本文である。わずか一、二例の異文があるが、それは書写過程に生じた異文と考えてよいものである。またわずか一例ではあるが、尾州家本と国学院大学本が共に同じ補入跡を留めているのが興味深い。あるいは、同一祖本ないしそれに近い本文を書写した伝本ではないかと思わせるのである。第二に、表記法や仮名遣いなどについては、国学院大学本のほうが、歴史的仮名遣いの正確さ

やや行「江」の表記の多用などに特徴が見られることである。第三に、朱の句読点や漢語の声点については、尾州家本のほうが詳細でかつ読みの進展が見られるものである。国学院大学本は、鎌倉期写本の河内本として、尾州家本と最も近似した本文をもち、その表記法や仮名遣いさらに朱点の句読点等についても大変に興味深いものをもった貴重な一伝本であるといえる。

(國學院大學文学部兼任講師 渋谷栄一)